

人民作家がいるところ —趙樹理『小二黒結婚』と殺害事件判決書—

加 藤 三由紀

はじめに

山の斜面に掘られた横穴の暗がり、一組の若いカップルが言葉を交わしている。男性は片膝をつき、女性は石に腰を下ろしているようだ。表紙にこの木版画を飾るのは、「通俗故事」(やさしいお話)と銘打つ冊子『小二黒結婚』の初版本(1943年)¹⁾である。表紙をめくると、「像這種從群眾調查研究中写出来的通俗故事還不多見」(このような大衆への調査研究から描きあげたやさしいお話はまだ珍しい)という彭徳懷の題辭がその筆跡のままに版木で刷られ、さらにめくれば冒頭の一節にカギ括弧つきで「劉家蛟有两个神仙，隣近各村無人不知」(劉家蛟には神様が二人、このあたりで知らぬものはない)と口調よく物語が始まる²⁾。半年後に再版されて、彭徳懷題辭が鮮やかな朱色となり、本文に挿絵が八枚生まれ、28頁になった。執筆から数ヶ月で出版に至り、初版4000部、再版5000部が刷られ、他の出版社等からも翻刻された。民衆に歓迎された証であるのは無論のこと、当時の出版状況からして破格の扱いであろう³⁾。

趙樹理は、現実には青年が殺害された事件をハッピーエンドに語り直した。殺された青年に当たる小二黒と彼の恋人の小芹は、新政権(抗日根拠地の共産党系政権)の新婚姻法⁴⁾を頼りに村のゴロツキ幹部による妨害をふりきり、親が定めた婚姻のくびきを脱して結婚する。小芹の母親を妖艶な姿の神おろしで村の男たちを取り巻きにする三仙姑にしつらえ、小二黒の父親には万事を占いに託す二孔明(エセ孔明)の異名をとらせ、宗教への信心による旧弊を笑いで掃って、本人の自由な意志で決める婚姻を後押しし、ゴロツキ幹部は新政権

に逮捕させて、趙樹理は小二黒と小芹を結婚に導いた。『小二黒結婚』は、日本軍の侵攻に日々晒されていた太行山一帯の村々で評判をとり、根拠地各所の劇団が芝居に仕立てて上演し、数年後には毛沢東『文芸講話』の実作として文学史上の里程碑となった⁵⁾。

1946年「趙樹理方向へ進め」⁶⁾との号令が後押しした人民文学の枠組みは、1950年代以降の文学システム⁷⁾の基礎となり、21世紀の今日では、共産党が率いた革命の称揚をはかる「紅色経典」という名の文化政策として改めて強化されている。数ある「紅色経典」の一作として『小二黒結婚』にも研究の枠を超えたアプローチがなされている。そして本作の原型である青年殺害事件が起きた村からも、声が上がった。文字を操る職業人ではない村民の言葉は、正史に対する野史にも似る。資料の面では、古書や古物の流通が経済活動に組みこまれたことで、公的機関の外から思いがけない物が現れた。民間から売りこまれた「致徐懋庸」が偽書と判明する一幕もあったが⁸⁾、冒頭に紹介した『小二黒結婚』の初版本は、民間に眠っていたものだった。さらに、青年殺害事件の判決書が今世紀になって発掘された。事件の概要だけを見れば、判決書に記載された「事実」とこれまで知られていたことの間に大きな隔たりはない。だが、新政権の法廷が下した判決書が、二人の関係を恋愛とは認識していなかったことは意外であった。判決書においてその関係を指すとおぼしき文言は「争風嫖娼」（商売女をめぐってさや当てをする）である。この四文字は、事件当時この事件をめぐって、村の青年たちの関係を村人がどう見ていたか、それを新政権がどう受け止めたかを雄弁に語っている。趙樹理が恋愛として描き上げたものを、判決書は性の乱れとみなした。自らの意思に基づく婚姻を掲げていた当時の新政権が、この時、その芽を摘んでしまっていたのかもしれないのである。

研究面では、社会史やジェンダーの視座からの成果が著しい。本稿では、この判決書や村の声、近年の優れた『小二黒結婚』論を参照し、本作を1940年代の文脈に返してとらえ直し、『文芸講和』の文脈とは異なる人民文学の在り方を探る端緒としたい。

1. 事件に遭遇するまでの趙樹理

1942年1月、129師団政治部と中国共産党晋冀豫区党委員会が、山西省渉県で晋冀豫区文化工作者座談会を開いた。参加者400人を超す規模の大会である。初日に鄧小平が語り、翌日からの討論会では大衆化、通俗化をめぐる激しく意見が対立した。三日目に趙樹理が数多の実例を挙げ、大衆化待ったなしの現状を実証したと大会報道に記録されている。大会閉幕の辞で李雪峰は、現実の問題を直視するため半年ほど農村調査に入ることを文化工作者に期待した⁹⁾。中共中央北方局党校党委員会書記の任にあった楊獻珍は座談会終了後に「われらが家財はいかほどか」¹⁰⁾を発表し、大会で楊獻珍と対立した「新派」文化人をたたいた。その代表と目されたのは徐懋庸¹¹⁾である。徐懋庸等「新派」が、通俗文芸推進を図る者たちに「旧派」のレッテルを貼り文芸工作者を分断したとして、楊獻珍は怒りをたぎらせた。続けて楊獻珍は、1941年の出版物のうち大衆読み物は2%にすぎず、投稿原稿270作のうち通俗文は3篇のみ、演劇もしかりで、彭徳懐が「文化人には大衆の中に入って大衆が必要とするものを観察してほしい」と大会で述べたと記す。

調査研究を求められたのは「文化人」に限らない。白区から根拠地に配属された農村を知らぬ上級幹部は現地の求めに応じられず、抗日戦争が始まってから共産党が率いる新政権に参加した幹部は農村出身で視野が狭い。太行区共産党組織は整風運動の重要な一環として各党組織の責任者自ら農村へ入り調査研究に当たるよう求めた。1942年から43年、戦禍と天災で根拠地が最も困難だったこの時期にこそ、調査研究が最も発展したという¹²⁾。その調査研究の成果の一つに農村女性調査があり、本作と当時の受容状況理解に欠かせない資料になっている。これについては後述したい。

1942年の座談会后、日本軍の集中的な侵攻が始まり、1942年5月、第八路軍副総参謀長の左権までもが太行山中で爆死し、農村調査の要となるはずの北方局調査室幹部も全て命を落とした。北方局書記と党校校長を兼任していた彭

徳懐は、調査室を部隊から切り離して党校のもとに置き、人選の相談にあずかった楊献珍が調査室充実のため通俗文芸にたけた趙樹理や王春らを推挙した¹³⁾。こうして、1943年初めごろ、趙樹理は北方局党校調査研究室に配属となり、調査研究のために赴いた山村で青年殺害事件に遭遇した。

2. 趙樹理が語った事件概要

『小二黒結婚』に原型となる事件があったことを世に広めたのは董均倫の記事である。取材に応じた趙樹理の談話をまとめた「趙樹理はどのように『小二黒結婚』の材料を扱ったのか」が1949年に『文芸報』¹⁴⁾に掲載され、これが事件の真相とみなされてきた¹⁵⁾。当該記事の概要を以下にまとめておく。

1943年、趙樹理は農村調査の任を帯び、遼東の村に入った。新政権の役場があるこの村へ、所管の集落から男が訴えに來た。男の甥の岳冬至（小二黒のモデル）が、幹部らに呼び出され、翌朝、牛小屋で縊死しているのが発見されたと言う。牛小屋は外から門がかかっていた。村の幹部はみな青年で、べっぴんさんの智英祥（小芹のモデル）の家に集うのが楽しみだった。智の母は男女同居を許さぬ宗教に入信して父を追い出し、40歳すぎの裕福な商人に娘を嫁にやるという結納の品を受け取ったが、娘は物をもらった者が嫁にいけと婚約を拒み、母の入信を嫌った二人の兄も妹に賛同したので、母は首をつり死んでしまった。こうして智が恋愛する条件が整った。岳冬至は19歳で、9歳の童養媳をめぐり父とけんかが絶えなかった。村長は富農で村唯一の小学校卒業生であり、既婚者だった。この村長ともう一人の幹部（既婚者）が智に横恋慕し、腐敗を罪名に岳をつるし上げた。岳が恋愛は正当だと主張したので、手が出て殴り殺してしまい、縊死に見せかけたのだった。以上が県政府の捜査で判明したことである。二人の恋愛は合法であるのに、社会では二人の家族も含めて誰も同情せず、村人は殺害はやりすぎだが懲らしめは当然だと考えていた。趙樹理のなじみの村々にはゴロツキ出身の横暴な幹部が多く、新政権誕生当初のスキをつき幹部に抜擢されていた。趙樹理は正面人物が封建的慣習に食われたのでは若者を励ませないと思ったが、革命初期で大衆的な勝利は実例が少なく、

政府に解決してもらおう以外の方法が見つからなかった。

以上が趙樹理談話のあらましである。「二人の恋愛は合法であるのに、社会では二人の家族も含めて誰も同情せず」の「社会」という語が、村社会に限定されず新政権も指すならば、後述する判決書の発見を待たずとも、事件を恋愛物語に編んだのは趙樹理独自の調査と視角によることが、この記事から推察できた¹⁶⁾。

3. 事件捜査担当公安局員の回想記録

事件から半世紀がたち、この件を捜査した太行革命根拠地第三専署所轄左権県公安局公安局員趙晋塵の短い回想¹⁷⁾が出された。以下がその概要である。

事件があったのは1943年4月末から5月のことで、現場は横嶺上村（横嶺村は自然村であり、上と下の二つの集落からなる）、通報者は岳冬至の兄である。趙晋塵らは左権県公安局長の命で事件捜査を担当した。村長がこの件を表沙汰にせぬよう頼むので趙晋塵は怪しみ、捜査を進めたところ、岳に暴行した青年幹部四人を突き止めた。岳が智二良（小芹の原型は、姓は智だが名は資料によって表記に揺れがある）と密会したと誤解した四人が岳冬至を殴り、史虎山が陰囊を蹴って死なせてしまったという。四人の供述が一致したので県公安局看守所へ連行して裁判にかけた。殺意はなく未成年であり罪を認めていることから、有期刑が下された。この間、趙樹理は自ら現地で調査していた。趙晋塵は20日余りを趙樹理とともに過ごしたが、『小二黒結婚』が出版されて初めて、創作の取材だったと知ったという。

趙晋塵の回想を記録した董維民の前置きには、「智は村の若者を惹きつける娘で、彼女は岳を愛していたが、岳には8歳あまりの童養媳がいた」¹⁸⁾とあるが、『小二黒結婚』が知られてからの記述であり、事件当時に「愛」という言葉が使われたかは疑わしい。また、捜査した側が岳と智の間柄をどう見ていたかも、この回想からは明瞭ではない。

4. 岳冬至殺害事件判決書

文革後、膨大な資料を収集し考証を重ねた董大中は、『趙樹理年譜』に「1941年から45年、左権県では殺人事件が多発し、残されている公文書も多いが、岳冬至殺害事件や村幹部の悪行案件にかかわる文書は残っていない¹⁹⁾と記している。21世紀に入り、その判決書が民間で発見された²⁰⁾。「左権県県政府刑事判決書法字第66号」²¹⁾である。

この判決書は「主文」、「事実」、「理由」からなり、日付は民国32年6月5日、左権県県政府刑庭県長等の名と押印がある。被告は横嶺村の男四名、史虎山、王天宝、石羊鎖、石猷瑛で、史のみ未成年である。「主文」は、「史虎山は岳冬至を蹴り殺したが未成年につき、有期刑5年、公権剥奪5年に処する」とし、続けて他の三名の量刑が述べられている。下記の「事実」から未成年の史に妻がいることはわかるが、他の三人が妻帯者か否かの記載はない。当時の状況からしてみな妻帯者と推察される。

「事実」と認定されたのは、以下の事柄である。

陰暦3月16日（新暦4月20日）、横嶺村婦女救国会による戸口調査の際に、岳冬至が「妙なまねはするな」と罵り大便をかけようとした。また、岳は妻をよく殴る。そこで夜に会議を開き、女性十人余りを招集して岳をつるしあげた。ところが岳は過ちを認めない。青年部長の史虎山は岳と「争風嫖娼」という関係にあり、岳を恨んでいた。解散後、村長の石猷瑛、救聯会の石羊鎖は史虎山と王天山に岳を縛って村役場へ連れて行け、拒否したら殴ってもよいと命じた。岳は縛られると地面にころがり動こうとしないので、史と王は棍棒で岳を打ったが、史が思わず蹴ったのが陰囊に当たり、致命傷となってしまった。史はなすすべもなく、石猷瑛、石羊鎖が死体を岳の家の牛小屋に運んで吊し、縊死したことにした。翌朝、岳の兄が牛小屋で死体を発見した。本府が職員を派遣し検視したところ、殴打ののち陰囊を蹴られ死亡したことは確実である。本府の尋問に各々先のように供述した。

以上の「事実」を踏まえた量刑の「理由」にも「争風嫖娼」の四文字が使わ

れている。関連部分のみを引く。「史虎山と岳冬至は争風嫖娼による怨恨関係にあり、岳冬至を蹴り殺したことは生命をもって償うべきである。」次に『中華民国刑法』に基づく減刑を説明して、判決書は閉じられる。

判決書に智の名はないが、岳と史がさや当てをした「娼」とは智を指すのだろう。『小二黒結婚』で三仙姑に注がれた「娼」への眼差しは、法廷において、小芹のモデルの智に向けられていたのである。法廷が依拠した捜査記録も同様であろう。岳が妻を殴るとあるのは、岳が戸口調査を嫌ったのは妻と認めたくない「妻」、小説の設定でいえば童養媳がいたからかもしれない。当時の村では、童養媳であれ、若い許婚であれ、そのような相手がいれば既婚者とみなされた。

事件が起きた横嶺村には、新政権から派遣された幹部は在住せず、村長は村民だった。『小二黒結婚』には、新政権が派遣した村長が登場する。小二黒を糾弾するゴロツキ幹部に対して、ふだんは彼らに騙されている外来の村長が、この時は「幸い頭がさえていて」、「誰かと恋愛しても法には触れるわけではなし、そんなことで人は縛れませんぞ」と諭すのである。ところが、現実の横嶺村の事件では、県にさえも、この事件に恋愛という言葉を与える幹部はおらず、法廷はこの案件を乱倫による殺人事件ととらえた。趙樹理の調査研究から生まれた『小二黒結婚』は、新政権のもとにあるこの法廷の男女関係のとらえ方とは全く異なる。

この事件が起きた4月20日、太行区では女性工作に関する会議が開かれていた。彭徳懐が各地の経験を総括して会は閉じられ、7月に浦安修「五年来の華北抗日民主根拠地女性運動の初歩的総括」が発表された。浦安修の総括には、「娼」に関して次のような記述がある。当初女性運動に積極的だったのが、社会で「破鞋」と呼ばれる女性たちだった。その奔放な行動は反感も招いたが、「男女平等」「女性解放」のスローガンは彼女たちが広めてくれたのだ。その後、幹部たちは彼女たちを蔑視し、あるいは、職としての娼妓と混同し、女性工作の対象から外すようになった。村での工作を進めるにつれて、性関係の乱れは階層や年齢により、それぞれの形で存在することがわかった。富農では夫婦それぞれが「対象」(お相手)を見つけ、貧農では家族も同意して職とする女性も

いる。金がない独身者は「相好」(いい人)を求める。それはありふれたことで人目を忍べば問題ないが、表に出た場合は女性の側が強く非難される。嬰兒死亡率の高さが淫乱を招き、農民の生産への熱意を削ぎ、団結を阻み、嫉妬による喧嘩が絶えない。その責を女性に押し付け蔑視するのは間違いである²²⁾。

趙樹理は『小二黒結婚』を判決が出る前の5月に書きあげている。その手稿を、楊献珍は彭徳懐に見せた。彭徳懐夫人の浦安修も読んだという。「大衆への調査研究から描きあげたやさしいお話」という題辞を贈った彭徳懐には、小説の一語一語が依拠する現実が見えていたに違いない。

5. 眼差しを変える語り

判決書によって照らし出された趙樹理の視角の意義を明晰に論じたのが、張伝敏「暗がりの自由と自由の暗がり——謎解き趙樹理『小二黒結婚』」²³⁾である。張は根拠地社会研究²⁴⁾によって『小二黒結婚』を当時の文脈に返し分析した。

判決書が「娼」とする女性の行為が伝統社会の常軌を超えていたことは確実に、その行為に注ぐ眼差しの違いこそが趙樹理と当時の公安局員や村民との分岐点であり、趙樹理は1940年代太行山地区農村の性愛関係の内にある自由を発見したのだと張伝敏は指摘し、さらに、自由とは何か、それを保障するものは何かを訴えかける。「自由とは、そもそも暗がりに芽生える。白日の下にすべてを晒されるとしたら、すでにそれは自由ではない。このことを趙樹理が理解していたのかどうかはわからないが、自由な愛、主体的な婚姻には、この暗がりの暗さがなければならぬ。三仙姑とその「老相好」(ふるなじみ)の風紀の乱れを土壌に趙樹理は小二黒と小芹の自由恋愛の花を咲かせた。」この一節は、テキスト分析を借りて今日状況に対して投げかけた論者の強烈なメッセージであろう²⁵⁾。

張伝敏は判決書との対比から、自由や主体性を保障する暗がり、表向きの社会通念からの逸脱を許容するプライベートな領域を、趙樹理の描いた作品世界に見出した。ならば、ヤオトンの暗がりや密会する二人を描いた『小二黒結婚』の表紙絵と、読者に鮮烈な印象を残す三仙姑こそが、自由と主体の表象となる。

ヤオトンの表紙絵は、のちに本作が作品集に収録される中で印象が薄まり、挿画で胸を張る二人の顔がクローズアップされていくようになる。ヤオトンという地域性の強さもあるが、作中のわずかな密会場面に胸躍らせる社会ではなくなったこと、そして、20世紀後半の一時期まで輝く団円が文学の定番となったことも、その一因であろう。団円に向かって、三仙姑は、区の役場から帰って自らの姿を鏡に映し、社会通念で年相応の身なりを選ぶ。三仙姑評価は本作作品論の争点の一つで、評価者が置かれたコンテクストを明示しているのだが、本稿では立ち入る紙幅がない。いずれにせよ、これまで本作の団円前の部分にこそ「自由の土壌」が描かれているとの指摘がなされたことはなかった。

今日の中国における趙樹理研究の中には、自由、主体性、自己決定権などの概念を外から移植されたものではなく、その共同体の内部に見出そうとする論考がいくつかある。そのような研究は、変革の芽を変革すべき対象の内に見だし、それを育む趙樹理の独自性を指摘する。

趙樹理作品に新旧の語彙が効果的に使われていることは、かねてより指摘があるが、朱康はそれを意識変革に結ぶ論として展開した。「大衆自身の闘争生活によって大衆自身を教育する」という当時の調査室の目的を、「大衆自身が大衆としてのアイデンティティをもつこと」と敷衍し、新政権から派遣されて村にやってきた村長が、村の他のことにはゴロツキ幹部に騙されていても、小二黒と小芹については「幸い頭がはっきりしていた」のは、「恋愛」という語彙を村長が持っていたからであり、乱れもすれば真っ当にもなる「相好」という関係を、「恋愛」という語で捉えなおすことでそれが「自主」に育つと考察する²⁶⁾。

また、程凱は、三仙姑の取り巻きも二諸葛の占いも農村の活力の表れとし、趙樹理はその活力に方向づけをする文化権力基盤を重視したとする。二諸葛と三仙姑の迷信を笑うことで村の旧法則は「理」を失い、新法則は迷信を否定するが故に「理」を獲得するが、その過程は村内部では完結せず、村の倫理によらぬ区の役場という空間が必要だったと分析を重ねる。そして、旧を新に変革するのではなく、旧の再生を求めるが故に、丁玲『新しい信念』の老女が遂げる自己解放とは異なり、趙樹理の描く人物は農村社会の悪弊を超越することな

く、三仙姑のように区政府で笑われた我が身を鏡に映して見ることで、身なりも人となりも改め、農村社会が求める「正常」へと帰るのだという²⁷⁾。旧の再生は新ではないとする程凱の論は、共同体をゆさぶる者が団円で回収される構造の説明でもある。

批評家の役割が、作品が生み出した意味と作家の思考を、「自分が生きている時代の人々が共通して用いていることばに転換すること」²⁸⁾にあるならば、以上のような論考はその役割を果たし、趙樹理の文学世界が現代に生きる我々の世界と無縁ではないことを示している。

1943年冬、武郷県の劇団が秧歌劇に改編し、三仙姑が呉先生（小芹を後妻に迎えようとした商人）にいちやつく姿を演出したところ、それを見た趙樹理は、「三仙姑は曲解されている。農村にこんな破廉恥な女性がいるものか。こんな俗っぽいぐさは、悪趣味な人を喜ばせるだけで、社会全体によく影響を与える。芝居は人をよき方向へ歩むよう勧めるものだ。三仙姑は反面人物だが、それでも社会に副作用を与えるようなことは避けなくてはならない」と語ったという²⁹⁾。娼婦を見るが如き眼差しが三仙姑に注がれることを趙樹理は望んではいなかった。だが、三仙姑に「娼」を欲望するのは特殊な例ではあるまい。そもそも、それを連想させるきわどい表現が作中の随所にみられる。二つ三つだった小芹を三仙姑のふるなじみたちがだっこして「おれの娘だ」と言い、「小芹は三仙姑と違って、うわべではみんなと楽しくやっていたが、実際はみだりにつきあうことはせず」という表現もある。ゴロツキ幹部が小二黒を青年抗敵先鋒隊の隊長にしたのは、小二黒ならば「美少年で楽しいと思った」からである。小芹が縛られ区政府へ送られたときに三仙姑が口にした「小芹がやられて（原語は「吃亏」）とてもうれしかった」という表現も、ここでは性的な意味あいは薄い、時にそのニュアンスを多分に含むことがある。

では、それまで「悪趣味な」眼差しを向け、それと表裏一体で昔ながらの婚姻形態を壊すものを「争風嫖娼」と名づけてきた人々が、「恋愛」「自由結婚」「婚姻自主」へと視線を転換したのはなぜなのか。「娼」の役割を三仙姑に負わせて小芹を純化し、現実には不幸にも「恋愛」という語彙を持たなかった新政権

の幹部を「恋愛」を解する村長と区長にすげ替え、悪玉のゴロツキ幹部を排除すれば、聴き手に価値観の転換が起きるのだろうか。

ここに語り物という形式の意味があるのだろう。趙樹理の眼は語り手に託される。童養媳がいる小二黒も、母親が結納をもらった小芹も、当時の通念では既婚者だが、語り手の言葉が聞く者の視線を変える。聞き手は、二諸葛の占いや三仙姑の神おろしが信じるに足りず、小芹が「正経」(まっとう)で金旺に肘鉄食わせたことを知っている。さらに語り手は、この村の人々が二人に同情していることを聞き手に伝えている。小二黒の童養媳を「女房」とは見ておらず、自ら望んだ婚約でなければ婚約ではなく、二人は既婚者ではないという村長に理があると作中の村人は受け止めている。

では、聞き手が語り手の眼を我が眼と思えたのはなぜだろう。新語をユーモラスに交える語り聞く者は自然と思考を促される。三仙姑も個性はそのままに、なぜ神おろしをして、羽目を外すのか、三仙姑の身の上から理解できるよう、三仙姑が生んだ子どもの数まで細かく伝えておくのも趙樹理文学の特徴であり、それは深い共感を呼んだことだろう³⁰⁾。三仙姑の新しい取り巻きの若い衆に当てた「団結」という語は、ユーモアを醸すのみならず、「恋愛」や「自由」に連なる新しい語彙でもある。いつの間にか聞き手は新しい語の枠組みへとスライドし、聞き手にとって小二黒や小芹は村へ舞い降りた異星人ではなく、自分自身の内にも宿る何者かになるのであろう。それは人間を生まれ変わらせる革命とは異なり、今の自分の身内にあるものを知覚し、新しい名づけをすることである。この時代の趙樹理にとって、現実の社会はそうにしてしか動かないものだった。

6. 21世紀に発せられた村の声

趙樹理は執筆後によくこの村の権力構造に気づいたと語っている³¹⁾が、村の後日談に関する官の資料は今のところ見られない。一方、村では、往時を知る人々の口述を村民の曹文生が記録していた。2006年、この記録による記事が出た³²⁾。裁判後の村の困惑と21世紀の村の困難を伝える民の声である。

ここでは事件が起きた年を1941年としている³³⁾。横嶺村抗日民主政權の村幹部が緊急会議を招集し、支部書記が抗戦と春耕の手配をしてから、会に参加していた三人の青年幹部を批判した。岳冬至と史虎山が智英賢（ここでもその名の表記は揺れている）を好きになり、三角関係だったからだ。智の父が娘には許婚がいると支部書記に訴え、支部書記は三人がまっとうな婚姻を妨害し村の風紀を乱していると激怒した。翌朝、岳の死体が発見され他殺と認定されたところは、他の記録と同じである。支部書記、村長、副支部書記と民兵隊長（史虎山）の四人を公安局長は疑い、県政府へ連れて行き収監した。日本軍の侵攻によって県政府が移動することになり、容疑者四人は武郷県へ護送され、日の当たらない炭鉱の穴に入れられた。地下の暗闇で四人は恐怖に襲われた。そこで、最も嫌疑の強い史虎山が罪をかぶる代わりに、他の三人は村に戻ったら史の畑の面倒を見ると約した。だが県政府は彼らの策略を相手にせず、一年間収監した後、四人とも若くて証拠も不十分だったことから釈放し、みな村へ帰した。史虎山は憤懣やるかたなく一年後に病死した³⁴⁾。三人は村の仕事に参加することはなくなり、冤罪をかこった。この「醜聞」については、当事者は語りたがらず、村人は話題にしたがらなかったが、関係者で最後の一人が亡くなり、ようやく村人の口が開かれた。事件後、智は村を出て許婚と結婚したが、今では彼女もあの世である。真犯人は他におり、政府は善人を苦しめたが、銃殺しなかったのは救いだった。事件が村で忘れられようとしたころ、思いがけず、「公家人老趙」（お役人の趙さん）が記憶の形を団円に変えたのだった。

記事によれば、この裁判が四人の青年たちの未来を閉ざしたと村民たちは考えている。武郷への移送についての個所では、先述の趙晋塵の、囚人を日本軍侵攻から守った苦労話と一致しており³⁵⁾、曹文生という村民の聞き取りはかなり正確であろう。とはいえ、実際に起きた事を確定するのは不可能である。

村民が以上のような状況を記者に語り、趙樹理の次男を省都太原に訪れたのは、昔の裁判に不平を言いたいからではもちろんない。それは、僻村の窮状を変え、村を存続させるためだった。

2006年、村は移転を迫られた。移転の補助金は出ても生計を立てるのは難し

い。代々受け継いできた村の農地と石造りの村の文化の存続を村民は望んだ。嶺の向こうにある石玉蛟村では、映画『古井戸』³⁶⁾のロケ地となったことで監督呉天明の献金等の援助を受け、ライフラインや村へのアクセスを整え、村名も老井村とし、観光業で栄えている。それにならい、横嶺村でも趙樹理生誕百周年を機に観光開発を企画した。事件現場の牛小屋と当事者たちの家、かつて趙樹理が滞在した家と日本軍の目を逃れるための隠れ場所、当時の資料や物品を保存し、口述記録を作成したが、アクセスを確保するには巨額の費用がかかる。村を廃墟にはしたくない、村に残り、果樹、観光で暮らしていきたい。それを実現するために観光化を企画したが、『山西日報』の記事でもスポンサーはつかず、「紅色経典」の『小二黒結婚』による村おこしはかなわなかった³⁷⁾。

この記事から十年以上が過ぎた今、この村民の願いは別の方途により村民自身の力で追求されている。村々を舗装道路でつなぐ政府の政策によって村の入り口まで車が入るようになり、出稼ぎで成功した村民が帰郷して果樹栽培に投資して、村おこしに尽力している。さらに、趙樹理の史跡を整え行政の補助に繋ごうとしている。小芹のモデル、智の家は中庭が三つの奥行きのある立派な家屋で、三仙姑のモデルが当時使ったとされる鏡などの調度品がある。村の伝承では、三仙姑（『小二黒結婚』では、主要人物のうち名がない村民は彼女だけである）は新政権に内緒で屋根裏の雑貨店を営んでいたという。来訪者は、伝統社会の常軌から外れた三仙姑らしい姿を思い浮かべることだろう³⁸⁾。

趙樹理の作品と横嶺村の史跡、そして今の村を支える村民の営みは、自由に生きる権利、村の未来を村民自身が決める権利をどう獲得しどう守るのか、訪れる人に語りかけている。

おわりに

中華人民共和国の文学システムと人民作家としての経典化は、趙樹理のテキスト分析や資料収集を促し、民間の史跡を保存し、記憶や記録を今に蘇えらせた要因の一つであった。ただし、それに関わる人々の営みは文化政策によって制御できるものではない。この作が経典化されたからこそ記録された作品外の

世界と、中華人民共和国の文学システムが造った批評空間を、趙樹理文学の構成要素とみて作品をとらえなおしてみれば、開かれる世界は広いのではないか。以上述べてきた『小二黒結婚』をめぐる事象から、文学に意味を付与するのが受容者である限り、人民作家の空間は時の権力が与える枠を超えて広がることの一端なりとも見て取れればと願う。

注

- 1) 初版本表紙の書影は楊宏偉編著『趙樹理書影輯』(中国国際出版社、2016年、19頁)による。初版本は楊宏偉の個人所蔵で未見だが、楊は初版本が各地で翻刻されたとする。楊は出版時期を1943年10月とするが、北京図書館(現在の国家図書館)善本室にて論者が閲覧した再版奥付は「初版1943年9月」とする。同図書館所蔵の冀魯豫書店版(発行年月日、発行地不明)は初版本の早期の翻刻と推察され、四六判全24頁の袋とじ本である。一丁『趙樹理外伝』(中国文聯出版社、2011年、167頁)は、鉛印版以前に出た油印版書影を掲げる。再版は、表紙絵はそのままだにレイアウトを変え「大衆文芸小叢書之八」の語を付け加えている。
- 2) 中国人民文芸叢書『李有才板話』(新華書店、1949年)に収める『小二黒結婚』もカギ括弧をつけている。上海で出された『李有才板話』(知識出版社、中華民国35年12月初版)にはない。本稿『小二黒結婚』訳は拙訳(「小二黒の結婚」、藤井省三編『中国ユーモア文学傑作選 笑いの共和国』、白水社、1992年)による。
- 3) 姚文錦等『晋冀魯豫辺区出版史(山西部分)』(山西人民出版社、2009年)によると、それまで文学には印刷の手がまわらず、『鷹の歌』『海燕』『阿Q正伝』なども油印で300~500冊が限度だった。新華書店がようやく鉛印の施設と人員を導入したのが1943年10月のことであった。
- 4) 1942年「冀魯豫辺区婚姻暫行条例」公布、翌年「妨害婚姻治罪暫行条例」公布。
- 5) 延安での『文芸講話』が太行区で読まれるようになるのは1944年以降である。趙樹理は、『文芸講話』をいかに学んで小説を書いたのかとの質問には、小説

を書いた時には読んでいないとあっさりした答えを返している。「王瑤的発言」(中国作家協会山西分会『趙樹理學術討論會記念文集』、1982年、11-15頁、出版社名無し) 参照。

- 6) 周揚「論趙樹理的創作」(『解放日報』1946年8月26日)を皮切りとし、広範に趙樹理方向が推奨されていった。
- 7) 洪子誠『中国当代文学史』、北京大学出版社、2007年、第一章及び第二章。
- 8) 「致徐懋庸」は、六巻本の『趙樹理全集』(第二巻、大衆文芸出版社、2006年)に収めるが、五巻本『趙樹理全集』(北岳文芸出版社、2018年)では外されている。
- 9) 以上の経緯については、「四二年晋冀豫区文化人座談会紀要」(原載『新華日報』華北版1942年1月18-21日、『山西文芸史料第一輯晋盜難抗日根拠地部分』山西人民出版社、1959年8月再版、38-42頁)による。
- 10) 楊献珍「数一数我們的家当」(原載『華北文化』第2期、1942年4月25日)同上『山西文芸史料』所収。
- 11) 旧形式の通俗文芸を快く思わぬ徐懋庸ら「新派」文化人が『小二黒結婚』の出版を妨害したという誤解が1990年代に流れた。対立の構図が描きやすいせい、中国では楊献珍の回想のみを根拠として今も妨害説をとる研究者が絶えない。出版妨害説は1958年楊献珍訪問筆記録に始まるが、これは徐懋庸に対する楊献珍の強い反感から生まれた思いこみで、当時の政治状況、出版状況を考えれば出版妨害はありえなかった。妨害説の発端は、『山西文芸史料』に楊献珍のエッセイ(注10参照)が再掲された際に付された1958年8月の談話録である。その後、楊献珍「従太行文化人座談会到趙樹理的『小二黒結婚』出版」(『新文学史料』1982年第3期)により妨害説が広まった。徐懋庸は右派のレッテルを張られていたため1958年には反論できず、1981年に「回憶録」(原載『新文学史料』1981年第2期、第3期、『徐懋庸回憶録』人民文学出版社、1982年所収)で妨害を否定している。董大中は「『小二黒結婚』的出版史実」等一連の論文で妨害説に根拠がないことを論証した。董大中の各誌に掲載した論考は『趙樹理論考中巻』(中国文聯出版公司、1996年)参照。
- 12) 太行区革命根拠地史総編委会『太行革命根拠地史稿1937-1949』、山西人民出版

社、1987年、149-154頁。

- 13) 李士徳「暮色蒼茫念手足一楊猷珍同志憶趙樹理」、《趙樹理憶念錄》、長春出版社、1990年、65-66頁。
- 14) 董均倫「趙樹理怎樣處理『小二黑結婚』的材料」、《文芸報》第10期、1949年7月。
- 15) 無名だった趙樹理の紹介として広く流布した吳調公『人民作家趙樹理』(写読輔導叢刊第十二本、四聯出版社、1954年)もこの記事を踏襲した。なお、吳が『小二黑結婚』を延安解放日報に発表されたとするのは誤りである。
- 16) 1961年、「在長春電影制片廠電影劇作講習班的講和」(注8の五卷本『趙樹理全集』第四卷499-500頁)で趙樹理は、記者に問われるままに語ってしまったと些かの後悔を口にし、肝心なのは作者自身の心の言葉、作者が何を表現したかだと語っている。それは談話の肝心な部分が伝わらなかったことへの不満もあったのかもしれない。
- 17) 董維民「一起命案引出了『小二黑結婚』」、《山西文史資料》1997年第2期105-108頁。趙晋塵はのちに山西省公安庁第三處處長を務めた。山西省公安庁檔案館勤務の董維民が趙晋塵から聞き取って記録したものである。回想が発表された1997年には、趙晋塵はすでに亡くなっている。回想記録の前置きで、董維民は趙晋塵の回想を『小二黑結婚』に当てはめており、その記述の中には『文芸報』記事にはなく趙晋塵の言と思われる部分があるが、それらが回想で語られた際に使われた表現か否かは曖昧である。
- 18) 原文は以下の通りである。“智二良这个姑娘生得比较俊俏，惹得村里的年轻人都往她家里跑。但智二良就爱岳冬至，可是岳冬至的父母已给他收养了一个八九岁的童养媳。”
- 19) 董大中『趙樹理年譜(増訂本)』、北岳文芸出版社、1994年、225頁。
- 20) 邢曉壽「『小二黑結婚』創作源於一樁殺人案」(『党史文匯』2020年第8期、64頁)により、発見のいきさつを確認しておく。2003年左権県の「紅色收藏家」李立峰が骨董収集に横嶺村を訪れ、判決書を購入したところ、『小二黑結婚』と関連があるとわかり、山西省で著名な「紅色收藏家」王艾甫(元山西人民檢察院幹部)に譲った。王艾甫は私設の遼寧抗日戦争記念館にそれを展示していたが、

2012年、麻田八路軍總司令部記念館新館に原本を寄贈した。

- 21) 皇甫建偉、張基祥編『抗戰文化』、山西人民出版社、2012年、176-178頁。
- 22) 1943年2月26日『解放日報』に、女性の生産参加を女性の利益を守る中心問題に据える方針が発表され（中国女性史研究会『中国女性の一〇〇年—史料にみる歩み』青木書店、2004年、169-172頁参照）、1943年4月には、彭徳懐が晋冀魯豫辺区の女性工作を総括した。浦安修の総括文では、新婚法への期待と不安に関して農民の階層別にきめ細かい分析がなされ、一律に生産参加という方針を進めるよりは、現実に即した個別の課題解決の重要性を強調している。以上、「中国共産党中央委員会關於各抗日根拠地目前婦女工作方針的決定」、彭徳懐「在晋冀魯豫四区党委婦委聯席會議閉幕時的講演」、浦安修「五年來華北抗日民主根拠地婦女運動的初步總括」（王孟蘭主編『中国婦女運動歷史資料』、中国婦女出版社、1991年、647-649頁、675-716頁）による。
- 23) 張伝敏「晦暗的自由与自由的晦暗—赵树理『小二黒結婚』解密」、『名作欣賞』、2019年第32期、53-57頁。
- 24) 張伝敏が引く杜清娥『女性・婚姻与革命：華北革命根拠地女性婚姻与良性關係——以太行山区為中心的考察（1937-1949）』（2016年山西大学博士学位論文、未見）によると、主体的な結婚を推奨した中共抗日根拠地では、農村での婚姻や男女關係は明らかに変化し、男女比の偏りや貧困、婚姻後の性への不満などによって性關係が乱れ、婦人の90%が複数のパートナーをもつ地域があったという。
- 25) 「自由」という語は、三仙姑の焦りを語るところで「小二黒が小芹と自由結婚するともっぱらのうわさ」のように使われている。ここでは、村民にも三仙姑にも自由結婚とは自由な意思で結婚するというよりは、勝手に結婚すると解釈されていたと推察される。「自由」、「自主」については、叢小平「從“自由”到“自主”：20世紀中国革命实践与新詞語」（『開放時代』2020年第5期）参照、<http://www.opentimes.cn/html/Abstract/20692.html>。2020年10月20日閲覧。
- 26) 朱康「通俗化与倫理世界的重建 —作為“新啓蒙”故事的『小二黒結婚』」、『上海大学学報 社会科学版』2019年7月第36卷第4期、93-99頁参照。調査室目的の原文は、“用群众自己的斗争生活教育群众自己”。

- 27) 程凱「郷村変革の文化権力根基—再読『小二黒結婚』与『李有才板話』」、『文芸研究』2015年第3期、49-59頁。この論考は、中国社会科学院文学研究所「社会史視野下的中国现当代文学」プロジェクトの一環として、2014年に北京で開催された会議の成果の一つである。当プロジェクトは、文学テキストを歴史、社会、政治の文脈に返して解釈を試みる意欲的な研究を促し、テキスト解釈に有用な史料を数多く発掘して画期的な論考を生んでいる。
- 28) ツヴェタン・トドロフ著、小野潮訳『文学が脅かされている』、法政大学出版局、2009年、72頁。
- 29) 董大中『趙樹理年譜』(注19参照) 234頁の引用による。原文は、“朱玉楼《赵树理和武乡秧歌戏》中说：在该剧中扮演三仙姑的赵万山，与吴先生一场戏中调情的动作太出格。赵树理看了说：“三仙姑演得失真了，农村哪有这样不顾羞耻的妇女。这些庸俗的动作，只迎合了具有低级趣味的人，对整个社会影响不好。演习是劝人上进的，这个三仙姑虽是个反面人物，但还要防止她对社会产生副作用。”
- 30) 傅修海「趙樹理的革命叙事与郷土経験—以『小二黒結婚』の再読解为中心」(『文学評論』2012年第2期) は、「三仙姑の艶事についての叙述は、簡潔ながら情趣に富み、趙樹理が描いたような農民たちでなければ感得できないものだろう。(中略) 二諸葛の「恩典恩典」は封建とか軟弱という言葉ですませられるものではなく、その奥底には中国の庶民が生きる辛く困難な歴史的体験があまりにも多く含まれているのだ」(77頁) と指摘する。
- 31) 董均倫の取材(注14参照) に対して趙樹理は、「このときは村長の父親が陰の統治者であることに気づかず、ずいぶん後になってそれを知ったのだが、それがわかっていれば、全体の組み立てが変わり、今のこの作品とは別物になっていただろう」と語っている。
- 32) 馬小林「“小二黒”們呼唤趙樹理」、『山西日報黄河文化週刊』2006年7月25日。
- 33) 判決書は事件が起きた旧暦の日付のみで年は書かれていないが、事件が起きたのは判決書の日付の年と同じ1943年であろう。村の伝承と二年の差がある理由はわからない。
- 34) 王艾甫(注20参照) は村人からの伝聞として、16歳の史虎山は法的責任が軽い

人民作家がいるところ 一趙樹理『小二黒結婚』と殺害事件判決書一

と罪を押しつけられたと、記者の吉建軍に語っている（注37参照）。

- 35) 趙晋塵「億反掃蕩中的看守工作」、1987年6月3日付記録。http://news.china.com.cn/txt/2012-11/20/content_27173834_2.htm、2020年10月20日閲覧。
- 36) 原題『老井』、原作鄭義、1987年制作。
- 37) 関連する報道に、吉建軍「“小二黒”没有結婚」(『記者觀察』2009年第12期(上)、中国趙樹理研究会・山西省作家協會『中国趙樹理研究』2010年第1期11-13頁)、劉長安「循着趙樹理的足迹」(同上『中国趙樹理研究』8-10頁)、劉長安『苦旅』(中国文联出版社、2011年)がある。
- 38) 論者が2018年10月30日に行った横嶺村での聞き取りに基づく。横嶺村訪問の機会を下さった山西省晋城市趙樹理文学館と長治市趙樹理文学研究会に感謝したい。